那　須　野　巡　検　（松井先生）

昭和４６年１０月１１日～１４日

１１日　車窓観察及び荻野目

１２日　南金丸（馬場　中坪部落）

１３日　倉骨（笹原部落），鹿畑（西鹿畑部落）及び那須支庁舎

１４日　荻野目及び市農協

１１日。東北本線にそって車窓観察を行なう。台地上では陸稲，さつまいも，落花生などが栽培されている。一方，浅く開析された谷では水稲が栽培されている。このように台地上と谷とは，土地利用上はっきりと区別されうる。しかし近年では，揚水ポンプにより台地上でも水稲栽培が可能になったので，かってほどの差異は認められなくなっている。また北西方向に防風林をもつ集落がみられる。

大田原市の南部にある荻野目にむかう途中，二度ほど用水井戸の深さを測定する。（図１１日）いずれも浅い。９月に雨が多いので，水位が上昇しているためと考えられる。荻野目付近には那須野面が開析されてできた谷が走っている。崖にそって，その比高を測定する。（図１１日）那須野面は揚水ポンプにより水田化が進んでいる。朝から小雨模様であったのが本降りになり，早めにきりあげることになる。

１２日。馬場付近で那須野面と親園面との境にある崖の比高を測定する。（図１２日のＡ）那須野面にはバス道路やコンクリートで固められた用水路がほぼ東西に走っている。ここでは用水と揚水ポンプにより，水田化が進められてきた。親園面は沖積地であり，水が容易に得られるので，古くから水稲作がおこなわれている。崖にそって東に進み，ａ，ｂ，ｃ，ｄ地点でそれぞれ比高の測定を行なう。（図１２日）中坪の東には東堀洞門のとり入れ口がある。この用水は豆田用水と立体交差し，道路や台地をくぐり，東堀の補給水として湯津上村根本に送られている。このように苦心して用水をつくり，水を得ていることは私達の想像以上であった。

１３日。倉骨の笹原部落付近で那須野面と親園面との比高を測定する。（図１３日）このあたりでは牛舎や小規模なサイロ，牧草地がみられ，酪農がおこなわれていることがわかる。だが水田の占める割合は多く，那須野面までよく水田化されている。バス道路を北東に向かい，坂を登りきると，金丸原面に出る。かっての林地がみごとな水田になっている。ここではまだ刈り取りが済んで

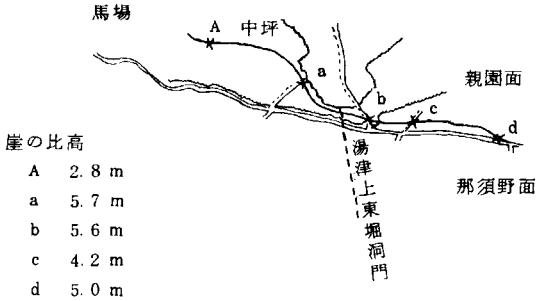
なく，黄金色に輝く稲穂が風にゆらいでいた。用水の水源を求め水路にそって行くと，崖の縁に簡単な貯水施設があり，下の那須野面（西鹿畑部落）にある井戸から汲み上げていることがわかる。揚水ポンプは比較的大きく共同所有になっている。

帰りに那須支庁舎に行き，主に用水についての話をうかがう。

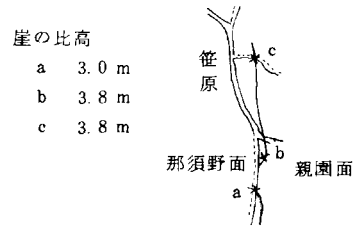
１４日　二班にわかれ，一方は再び荻野目に行き，重要な水源である泉を観察する。他方は市農協で，主に生産調整の行なわれている現状についての資料を得る。

私達は地図に表わされた金丸原面，那須野面，親園面などを実際に見て，その複雑さにあらためて驚いた。この地域では，親園面を除いて，元来，水が得にくいので，用水や揚水ポンプにより水田化が進められてきた。しかし，生産調整が打ち出された現在，もはや水田化の方向に進むことはできない。新しい方向として，施設園芸（荻野面，西鹿畑），どじょう養殖（笹原），唐辛子栽培（馬場）などが見られた。今後どのように進むかが問題になっている。

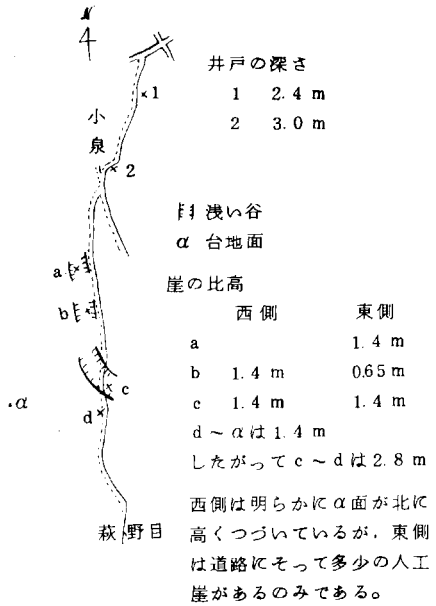
徽音祭の時には，巡検や講義をもとに那須野盆地について発表することになりました。いろいろ不十分な点もありましたが，松井先生にひとかたならぬおせわになり，どうにか為し遂げることが



12日　南金丸付近　1：25000



13日　倉骨付近　1：25000



11日　萩野目付近　1：25000

できました。私達一同，心から感謝いたしております。　　（3年　渡　辺　勝　江）

鹿島・那珂巡検　　（式　　先生）

昭和46年4月8日～10日

4月　8日　鹿島臨海工業地帯

　　9日　大洗海岸，那珂湊，久慈（日立）港

　　10日　水　戸　市

鹿島・那珂巡検は，鹿島神宮の近くの鹿島浄水場から始まった。この浄水場は，今回の巡検の大きな見学目的である鹿島臨海工業地帯の工業用水として，北浦からの水を揚げている。鹿島町は神宮や，多数の古墳からもわかる様に大変古い町で，一帯に海岸砂丘が発達しているが，工業地域として開発される前は砂丘地帯の貧しい農漁民の生活は惨めなものであったという。鹿島の人口は現在約2．5万人であるが，隣接する神栖町，波崎町を合併して市にしようとする計画がある。このうち開発の中心は神栖町と鹿島町である。開発にあたっては，鹿島方式と称する農工両全政策が県知事により進められているが，用地買収によって移転した農家の昭和34年の抽出調査では，その30．4％が離農をして，貸家業，商店を営んでいる。又米作をやめて観葉植物や温室栽培（ピーマンのビニールハウス栽培など）に転業する農家も多い。工業地帯自体は製鉄を基幹産業とし，工場の敷地も1つ1つの建物も大変大規模であるのが，いかにも〝鹿島臨海工業地帯〟という重厚なイメージであった。また，大工業地帯にはつきものの公害についても，その防止に巨額の投資をしているとはいえ，工業の規模が大きいだけに問題は大きいし，将来ますます深刻になってゆくものと思われる。付近の農漁民も，これまでの貧困からは一応解放されたとはいえ，こんどは大気汚染の恐怖に脅まされなければならない。砂丘の微高地から眺めた鹿島の空は灰色にけむり，何か陰惨な重苦しさが感じられた。

2日目には，午前中に大洗海岸の白亜紀層の隆起波食台を観察し，那珂湊の第2漁業協同組合を見学，ここを根拠地とする遠洋漁業の実態や，組合の運営状況などについてのお話をうかがった。午後からは東海村の原子力研究所，および久慈（日立港）の見学。日立港は現在建設中の港で，日立工業地帯のための港である。沿岸流による砂州を切って埋立て，商港とする計画である。

3日目は水戸市内で地形を観察し，その後茨城県庁で茨城県の開発についての概観的なお話をうかがい，鹿島，那珂巡検のしめくくりとした。この巡検を通して，工業の開発とそれに真向から矛